是モ亦表ニ竹皮ヲ出シ、紙ヲ狹ム物ニアリ、此菊骨、雨傘日傘トモニ有之、雨傘ハ大形白紙油ヒキ、日傘ハ小形淺葱紙張也、又小形日傘ニテ骨形如常、數卅九間、亘三尺二三寸、淺葱紙張ノ物ニ、表裏ニ骨ヲ出スアリ、ロクロギハヨリ二ツニワリ、竹ノ皮ヲ表ニ身ヲ内ニス、此菊形モ日傘ハ表裏ニ出シ、雨傘ハ裏ノミニアリ、表ニ出ズ、〇略中

愚痴拾遺物語曰、青張ノ日傘ハ踊子右衞門ニ始ル、舟ナドニ行クニ、菅笠ハ髪損ル故也、町奉行水野備前守制禁アリ、唐土青羅傘蓋ト云テ、大王青絹ニテ張傘アリ、凡人ハセマジキコト也、近年ハ大ニ流行ス、女ハ髪故ト思フニ、醫者坊主ハ何ゴトゾヤ云々、

三都トモニ、〇略中白モミジ傘ニハ、全クニ帖ミテ、骨表ヨリ溜塗トテ漆ニ辨ガラ交ヘタルヲヌル、帖或苫ムト云、日傘モ苫テ表ニ漆スル也、

〔男色大鑑二〕傘持てもぬるゝ身

爰に明石より尼崎への使者、堀越左近といふ人、生田の小野の榎木の蔭に雨舍してありしに、かゝる時十二三なる美少人、まだ夏ながら紅葉傘を持て差さで來にけり、

〔嬉遊笑覽二中器用〕風流傘は、文永賀茂祭の古畫にみゆ、是はたゞ見物の爲にて、傘鉾などの如し、太平記大森彦七の條に、裝束の唐かさ程なるといへるも、緣に帛など付たる唐かさをいふなるべし、

〔走衆故實〕一かさをば右にさすべし、左の手にては太刀のつかををさへ候やうに成たるがよく候、

傘用法

一御傘に參事、昔は御參宮などの時、御宮めぐりなどの時ならでは參候はず候、近年定たるごとく參候、是も御小者の役にてありげに候、上の御左のかたへまはり、右の手を上へなし、左の手を下になして、ゆるがぬやうに參るべし、風など吹候時は、御ゑぼしにあたらぬやうに、殊氣遣ふがしぎなるべし、〇略中